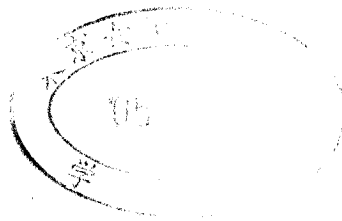


2005-B1-T1-2

共に生きる



※この写真・資料を複製すると著作権侵害となることがありますのでご注意ください。

テュートリアル委員会

西川恵、松下晋、萬野純恵、小松明、佐々木宏

シート

Kさんは45歳の主婦です。医師に「初期の乳癌です。日本の統計ですが、手術後5年以上元気な人が7割もいます。」と告知されました。Kさんはショックを受けました。

専門病院で「乳癌にまちがいない」と診断され、医師に勧められるまま、手術を受けました。手術は無事終了しましたが、Kさんは家事もできないくらいいふさぎ込んでしまいました。

2年後、Kさんは、信頼できる主治医に出会い、何でも相談するようになりました。また、Kさんは、同じように乳癌にかかっている人の集まりに参加したり、講演会に出かけたりしています。趣味の旅行に夫や娘とともに出かける機会も持っています。「生きていて良かった」Kさんは、温泉の湯をそっと胸にかけてみました。

[抽出が期待される項目]

- ①もし、自分が癌になったらどう思うだろうか
- ②もし、自分の母親や身近な人が乳癌にかかったらどうするか
- ③もし、自分が医師であったら、どのようなことに気をつけて対話をするか
- ④癌とはどのようなものか、乳癌とは何か
- ⑤5年生存率とは？日本の統計と欧米の統計の差はあるのか
- ⑥日本と欧米での乳癌のケアに差はあるのか
- ⑦告知とは、告知はどのようにされるべきか
告知を受けた患者の心理と患者への共感
- ⑧Kさんのころはどのように変化したのか？どのように心理が変遷する
のか
- ⑨セカンドオピニオンとは
- ⑩信頼できる主治医とは？何故2年もかかったのか、どのようにめぐりあったのか
- ⑪どんな集まりがあるのか、どんなサポートがあるのか
- ⑫家族とのかかわり、家族はどのように支えているのだろうか

[抽出が予想されるその他の事項]

- ・乳癌の治療法、予防法
- ・乳癌のリスクファクター
- ・どのような医療機関の選択があるのか
- ・日本の医療制度と欧米の医療制度
- ・癌の末期医療